

五、

以上にとりあげた、「ゴザンス」系とみられる「テス」「デース」が、共に、「島後」南部地区を、分布の主域としている点は、注目しに値する。

隠岐にあつては、「島後」南部に位置する西郷町が、政治・経済・文化の中心地である。いわば、一般には、言語改新は、まず、この地域にみられることが少なくない。右の「テス」、「デース」も

言語新化の事実が指摘される。その分布状況は、よく、成立と分布との、相関の理を物語るものといえよう。

隠岐方言の「丁寧表現法」記述にあたつては、他に、動詞関係でも、「マス」「デス」などの活動をとりあげなくてはならない。小稿では、ただ、「ゴザル」一派にかかわる、特定の表現法をとりあげ、記述したにとどまる。

熊本市域方言における形容語イの研究

金 丸 和 子

目 次

序

第一章 意味による分類

第一節 意味分類

第二節 分野比較

一 分野相互の比較

二 各分野内での項目相互の比較

(A) 第Ⅰ分野 (B) 第Ⅱ分野

第三節 形容詞と形容動詞

第二章 語の形態による分類

第一節 形容詞

一 単純形容詞の語尾形態

(A) カ語尾 (B) イ語尾

二 複合形容詞の形態

(A) 体言＋基本形容詞 (B) 体言＋助詞＋基本形容詞 (C) 動詞

＋基本形容詞 (D) 副詞＋基本形容詞 (E) 形容詞語幹＋基本

形容詞

三 派生形容詞の形態

(A) 体言＋基本形容詞 (B) 動詞＋基本形容詞 (C) 形容詞語幹

＋基本形容詞

第二節 形容動詞

一 語尾形態

二 出自による語系

(A)和語系 (B)漢語系 (C)系統の不明なもの

第三節 音節数比較

序

ここに言う「形容語イ」とは、事物の性質・状態を表わす語の総体を指して、言わば、形容詞・形容動詞のすべてを含むものである。この形容語イについて、意味と形態との二面から考察し、実態を把握しようとするのが、この論文の目的である。

熊本在住の四人の被調査者を対象とし、共通語を手がかりに集めた形容語イは、661語に及んだ。方法を尽くせば、まだ収録し得る可能性はあると思われませんが、この661語をもつてしても、主なものはほぼ調査し得たとして差支えなからうと思う。この661という語数は主として形態の面から捉えた異なり語数である。意味の面からすれば、611を数えることになる。このように語数に差違があるのは、たとえば、「ナガカ(ナギヤ・ナンカ)」という語であるが、これは形態の面からは三語、意味の面からは、空間的ながさと時間的ながさとの二語と数えることになる。従つて、「第一章 意味による分類」における計数的処理においては、意味の面から出る語数を、「第二章 形態による分類」においては、形態の面から出る語数をとりあげることとする。

第一章 意味による分類

第一節 意味分類

意味分類は、宮島達夫氏の研究論文である「方言の語イ体系」に従つたものである。次に、この分類を、二、三の用例と共に表記してみる。

第一表

分野	項目	語数	用	例
1	1. いろ	18		シロカ・アカカ・キンナカ…
2	2. かたち	13		マルカ・ベタカ・ヒラタカ…
3	3. ふとか	5		フトカ・ホソカ・ホソナンカ…
4	4. ひろさ	6		セマカ・ヒロカ、テビロカ…
5	5. あつさ	5		ウスカ・アツカ・ウスツペラカ…
6	6. たかさ	3		ヒクカ・タカカ・コダツカ…
7	7. ふかさ	2		アサカ・フカカ
8	8. おおきさ	9		フトカ・コマカ・オーキカ…
9	9. とおさ	2		チカカ・トローカ
10	10. 空間的ながさ	3		ミジカカ・ナガカ・ヒヨロナンカ…
11	11. 時間的ながさ	12		ミジカカ・ナガカ・ヒサンカ…
12	12. ふるさ	8		フルカ・ワツカ・アタラシカ…
13	13. はやさ	3		オソカ・ノロカ・ハヤカ…
14	14. 材料の性質	11		ケゴイカ・ケブカカ…
15	15. こさ	7		ウスカ・コイカ・アクドカ…

II 人間性		質性										小計	16から3									
9 人間関係	8 社会的性質	7 性質	6 態度	5 動作	4 技術	3 知能	2 みかけ	1 健康	25 しずかさ	24 おとこえ	23 あかるさ		22 温度	21 におい	20 あじ	19 きれあじ	18 手ざわり	17 かたさ	16 かるさ			
12	6	88	36	8	7	14	8	7	187	5	10	7	15	11	17	1	2	9	3			
チカカ・ウトカ…	エラカ・キツカ・ユーフツカ…	ネツカ・エラカ・ズルカ…	アマカ・カラカ・メメシカ…	アラカ・スバヤカ…	マズカ・オロヨカ…	ドンカ・トロカ・コーシヤカ…	ヤボツタカ・イロツポカ…	ツヨカ・ヨワカ・タツシヤカ…		ウルサカ・ヤカマシカ…	ヨワカ・フトカ・ヒクカ…	クラカ・アカルカ…	ヌルカ・アツカ・サムカ…	クサカ・カバシカ…	ウマカ・マズカ・カラカ…	スルドカ	アラカ・ナーンピラカ	カタカ・ヤワカ・コワカ…	カルカ・オモカ			

V 抽象的的存在		感情と感覚 III										小計						
8 複雑さ	7 安全さ	6 難易	5 可能性	4 たしかさ	3 正常さ	2 異同	1 存在	6 効果	5 うまくい	4 運	3 ねだん		2 ねうち	1 よさ	2 感情	1 感覚		
9	13	7	1	2	20	2	3	56	8	19	5	4	9	11	103	89	14	186
フクザツカ・クワシカ…	アブナカ・ヨカ…	ヤスカ・ムズカシカ…	シヨннаカ	カッタルカ・エーカゲンナ…	ワルカ・タダシカ…	オナシ・イロンナ…	ナカ・ムナシカ…		ムダナ・トツバナ…	シブカ・キタナカ…	フノヨカ・ニクシナ…	タカカ・ヤスカ・コーダイカ…	トートカ・ガタナカ…	ヨカ・ワルカ・ヒドカ…		スゴカ・ホシカ・ニクカ…	ネムカ・ダルカ・カユカ…	

合 計	小 計	9 数量	11	オーカ・スクナカ：
		10 程度	11	ヒドカ・エラカ：
611	79			

以上で、形容語イの世界は、ほぼとりあげられることになろう。

第二節 分野比較

一、分野相互の比較

第一表を見てわかるように、五つの分野のうち、「ものの性質」を表わす分野と、「人間の性質」を表わす分野との語イ量が最も多くなっている。方言が、日常生活上の層々を反映していることを考え合わせると、これら二つの分野の位置は自ら明らかになる。この観点からすれば、語イ量の少ない「ねうち」や「抽象的存在」の分野は、日常、比較的、関心の薄い分野ということになる。

二、各分野内での項目相互の比較

次に、各々の分野の中で、語イ量の多い項目を抽出し、その現象について考察することにする。但し、紙面の都合により、第一分野「ものの性質」と第二分野「人間の性質」との、二分野のみについて述べることにする。

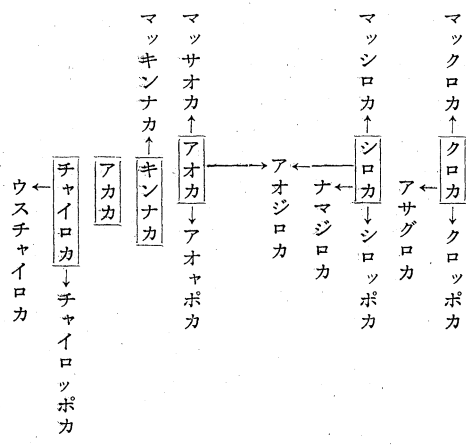
(A) 第一分野「ものの性質」

第一分野においては、「第一項・いろ」が、最も多い語イ量を有している。(第一分野の約10%)

「いろ」に関する語イのうち、「クロカ」「シロカ」などの、基本となる語イは、あまり多いとは言えない。にもかゝらず、「い

ろ」の項の語イ量が多いのは、そのほとんどが、接辞をとっているためである。このことは図示してみると、一層、明確になる。

第一図、()内は、基本となる語イ



第一図のように、位置付けてみると、「いろ」の語群は、接頭辞として「マ」を取り、接尾辞として「ポカ」を取って、「マッソイ基本形」・「基本形↓ツポカ」の型の語構成をもっている語群であることがわかる。

(B) 第二分野

第二分野においては、「第七項・性質」が最も多くの語イ量を有している。(約42%)

一つの試みとして、この7項の語イを、本来、人を誉める方向に

用いられるものと、本来、人を貶す方向に用いられるものとに大別してみたのが、次の第二表である。

第二表

誉める	貶す
エラカ・マメカ・マッスンカ ヤワランカ・ヒトンヨカ：	アラカ・ズルカ・コスカ・ツ メタカ・ケチクサカ：
36語・約41%	52語・約59%

第二表によれば、貶す方向の語イが、誉める方向の語イよりも多いことがわかる。この事實は、ともかくも、人々の、下向きの人間性への関心の深さを物語っていると解されるかと思う。その関心の深さは、一つには、自分自身にでもあれ、他人にでもあれ、とにかく歪んだことを異常とし、非難しようとする生活態度に起因しているとも考えられるであろう。この、人を貶す方向の語イのほうが、誉める方向の語イよりも多いという現象は、第Ⅱ分野全体をながめてみても認められる。人々の一つの倫理観が窺われるようで、注目すべきことのように思われる。

第三節 形容詞と形容動詞

第Ⅰ分野から第Ⅴ分野までの各々の分野における、形容詞と形容動詞との語イ量を示すと、第三表の通りである。

第三表より、形容語イの約81%は、形容詞によつて占められていることがわかる。形容動詞は、その職能においては形容詞とほぼ同じであるが、形容詞の不備を補う立場にあるということを考えると

第三表

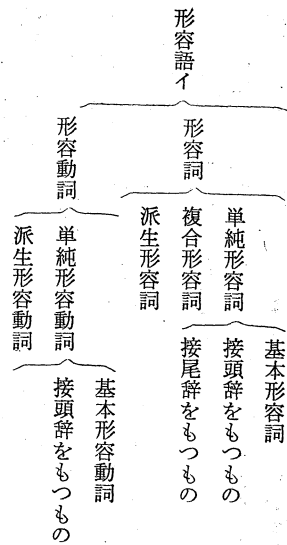
形容動詞	分野	
	形容詞	形容動詞
15	172	I
41	145	II
19	84	III
23	33	IV
19	60	V
117	494	計

それが、形容詞より語イ量の少ないのは、当然のことと思われる。形容詞と形容動詞との語イ量に、最も大きな差をもつ分野は、第Ⅰ分野「もの性質」である。反対に、差の最も小さな分野は、第Ⅳ分野「ねうち」である。この両分野を対照してみると、前者は、ほとんどが、具体的な表現に使用される意味の語イであることが注目される。たとえば、色・高さ・太さ・温度など。それに比して後者は、正常さ・可能性・確かさなど、抽象的な表現に使用される語イがほとんどである。従つて、少なくとも、以上とりあげた範囲においては、形容詞は具体的表現に多く使用され、形容動詞は抽象的表現に多く使用されやすいと言えるのではないだろうか。

第二章 語の形態による分類

形態分類を図示してみると、次の第二図のようになる。

さて、ここに言う「基本形容詞」とは、通時的にも共時的にも分離することのできない、最小単位の形容詞のことである。たとえば、「シロカ」「フトカ」「エラカ」といつた類のもの。この基本形容詞に、接頭辞や接尾辞のついたもの、たとえば、「マッシロカ」「シロポカ」といつた類のものがある。これら三つを統合して、単純形容詞と言っている。複合形容詞とは、たとえば、「シオ」と「カラカ」の二語が結びついて、「シオカラカ」となつても、「シオ



「とカラカ」夫々の元の固有の意味は依然として保たれている、この類のものを言う。派生形容詞は、一般の「派生語」の概念から少しずらして考えることにする。並通には、複合形容詞とも考えられるものである。しかし、先述の「シオカラカ」の類とは異なつたところがみられる。それは、分離された一つ一つの要素（普通には、後部分の要素）の意味が、本来、持つてゐるはずの固有の意味との間にずれを生じているということである。このような類の形容詞を派生形容詞と言うことにする。たとえば、「アセクサカ」は複合形容詞であるが、「フルクサカ」は派生形容詞と考えられる。なぜなら、「クサカ」は「嗅い」に関して用いられるのが、本来の固有の意味であるから。「アセクサカ」は、この固有の意味が生きてゐる。「フルクサカ」は、「嗅い」の範疇より、むしろ、「傾向」の範疇に入ることである。従つて、「アセクサカ」は複合形容詞であるが、「フルクサカ」は派生形容詞であると言える。

第一節 形容詞

形態的にみた語イ量にあつては、形容詞が形容語イの約82%を占めてゐる。意味分類も考えあわせながら、形容詞の、先述の形態別に語イ量をみると、五つの分野すべてにおいて、單純形容詞が形容詞の過半数を占めてゐることがわかる。（次いで、複合形容詞、派生形容詞の順）單純形容詞に関しては、その語尾形態について述べ、複合形容詞・派生形容詞に関しては、その形態について、夫々述べることにする。

一、單純形容詞の語尾形態

熊本市方言の形容語イは、「カ語尾」が基本であることは言うまでもないことである。しかし、一方、「イタイ」のような、「イ語尾」のものも、実際には音韻変化を起こしてはいるが、やはり認められる。

(A) カ語尾 (281語・約78%)

1、カ

(例) シロカ・フルカ・ウストロカ：

「ウストロカ」は、相手に対して、自分が気恥ずかしい思いをした時に、その気持を表現することである。ところで、この「ウストロカ」に、形態上、関係があるかともみられる。「トロカ」という語が、一般には「にぶい」という意味で用いられてゐる。「ウストロカ」は、この「トロカ」と「ウスカ」が結びついた、派生形容詞かとみられるかもしれない。しかし、「トロカ」・「ウストロカ」両者には、先述の通り、その意味に、共通点が皆無と言つてよいほどみられない。従つて、「ウストロカ」は、分離できない、一語とみなして良いと思われる。

2、シカ

(例) ヒサシカ・キビシカ・オトロシカ…

3、タカ

(例) ネムタカ・オモタカ・メデタカ…

(B) イ語尾(75語約22%)

1、語尾が「ai」の連母音をとるもの

「ない[nai]」のように、語尾が「ai」の連母音をもつものは、「a」・「i」の両母音が作用しあつて(相互同化)、「ニヤー[ni:~]」のように、音韻変化を起こした状態で使用されている。

(例) あかい[akai] → アキヤー[akja:]

うたう[itai] → イチャー[it{a:}]

くさう[kusai] → クシヤー[ku{a:}]

2、語尾が「oi」の連母音をとるもの

「おせい[soi]」のように、語尾が「oi」の連母音をとるものも、1、と同様に、「o」・「i」の両母音が作用しあつて(相互同化)、「オセー[se:]」のように、音韻変化を起こした状態で使用されている。

(例) しほろ[shiro] → シロー[shre:]

するどろ[surudoi] → スルデー[Surude:]

また、「あおい[aoi]」→「アウエー[awe:]」のように、渡り音[w]が中に生じている場合もある。

3、語尾が「ui」の連母音をとるもの

「あひら[atsu]」のように、語尾が「ui」の連母音をとるものほ、「エ」・「i」の両母音のうち、後の「i」母音が、前の「u」母音を同化してしまつて(逆行同化)、「アチー[at{i:}]」

のように変化した状態で使用されている。

(例) きつい[kitsui] → キチー[kitsi:]

しほろ[shiro] → シロー[shibi:]

ぬるい[nurui] → ヌリー[nuri:]

「イ語尾」の形容詞をみると、ほとんど三音節の語であることが注目される。

ニ、複合形容詞の形態

複合形容詞の形態をみると、次の五つの型に分類できる。

(A) 体言+基本形容詞

(例) アブラギツカ・イヂギタナカ・ギリガタカ・ダラシナカ・ジュツナカ…

「ダランナカ」の「ダラン」は、広辞苑によれば、「シダラ」の転で、「しまり」という意味だということである。従つて、「ダラシナカ」は、複合形容詞の(A)型形態に分類できることになる。「ジュツナカ」は、「術無カ」で、手もちぶさたで涙屈なことを言う。

(B) 体言+助詞+基本形容詞

(例) ミガナカ・キノヨカ・ジャキノナカ・ホーガクモニチャーザマンナカ…

諸方言においては、この形態の「助詞」には、「が」が多く使用されていると言われる。この熊本方言では、「が」の使用されているのは「ミガナカ」一例であり、一般には「の」が、主として使用されているようである。この「の」は、多く「ン」となつていゝ。また、「も(ム)」を使つているものもみられる。

(C) 動詞+基本形容詞

(例) ムシアツカ・ネグルシカ・キ(着)ヤスカ・ミヤスカ…

ここに用いられている動詞は、すべて、連用形で使用されている。

熊本市方言には、「容易」の意味で、「ヤスカ」が使用されている。従って、「キ(着)ヤスカ」・「ミヤスカ」は、複合形容詞の類に入れることができる。これに対して、「ワスレヤスカ」などの「くヤスカ」は、「傾向」の意味を示すものであつて、「ヤスカ」固有の意味からずれたものである。従つて、「ワスレヤスカ」は、派生形容詞とされる。

(D) 副詞+基本形容詞

(例) チョードヨカ・イサギューオーカ・ダダッピロカ：

「程度」を表わすことばに、この形態の形容詞が多く使われている傾向がみられる。「チョード」、「イサギュー」は、もつと多くの基本形容詞と結びつくが、「ダダ(タダ)」は「ダダッピロカ」一語のようである。

(E) 形容詞語幹+基本形容詞

(例) イタイトシカ・チカチカシカ・トードシカ・アオジロカ・カラニガカ：

「イタイトシカ」のように、重畳形態のものがみられる。この重畳形態のものは、みな、「くシカ」の語尾形態をもち、疊語の後部語頭音は、「チカチカシカ」のように、濁音になっている場合が多い。

三、派生形容詞の形態

ここで言う派生形容詞は、通時的には複合形容詞とも考えられるものである。そこで、複合形容詞の形態に準じて、派生形容詞の形

態を分類することができる。

(A) 体言+基本形容詞

(例) キ(気) マスカ・キ(気) ヤスカ・ココロツヨカ：

(B) 動詞+基本形容詞

(例) ミグルシカ・ミニツカ・トツツキニツカ：

(C) 形容詞語幹+基本形容詞

(例) ウスアカカ(明るさ)・ウスヌツカ・アサグロカ・フルクサカ・コマクルシカ：

複合形容詞、派生形容詞の形態は、以上の通りである。中に、結合の際、「ココロツヨカ」のように、連濁の現象を起こしているのがみられる。後部語頭音には、ガ行音の多いことが注目される。

第二節 形容動詞

形容語イの約18%を占める形容動詞は、形態の面から、単純形容詞と派生形容動詞とに分類できる。(複合形容動詞に該当するものはみあたらない。)派生形容動詞は、「キ(気)ラツカ」「エーカゲンナ」・「キノドツカ」の三語のみである。従つて、夫々の形態の語イ量を重視して云々するよりも、語尾形態、出自に重点を置いた方が有意義と思われる。

一、語尾形態

形容動詞の語尾形態は、次の三種に分類できる。

(a) カ語尾のもの(72語)

(b) ナ語尾のもの(42語)

(c) ナカ語尾のもの(3語)

(c)は、「ナ語尾」の形容動詞に、「カ語尾」が付接したものと考

えられる。

以上の三種をみると、「カ語尾」の優勢が確認される。これは、形容詞の「カ語尾」に類推して生じた、より新しい傾向と考えられる。このことは、右の数値の上からも、また、「トセンナカ」のように、「くナカ」の語尾を有するものが若干数みられることから推察できる。

分野別に、「カ語尾」と「ナ語尾」の語イ量をみれば、「カ語尾」は、特に、第一、第二、第三の各分野において優勢であり、「ナ語尾」は、第四・第五の両分野において優勢であると知ることができ。今後、第四・第五の両分野において、どのような変化が現われるか、注目していたいと思う。

二、出自による語系

語の出自によつて、和語系・漢語系・外来語系に分類してみる。外来語系は、収録した中にはみあたらず。漢語も、厳密には外来語であるが、その日本語に与えた影響は他の外来語に比して、莫大なものである。従つて、一項目を設けたわけである。出自の不明なものもある。

(A) 和語系

(例) マメカ・キレイカ・イキナルカ:

「イキナルカ」は「なげやりな」という意味である。広辞苑によれば、「行成」であつて、「成り行き」を転倒したものということである。思うに、成り行きにまかせてしまつて結果を気にしないという意味に敷衍して「イキナリ」を使つたものではなからうか。

(B) 漢語系

(例) インガナ・シュートーカ・タツジャカ:

漢語系の語イの方が和語系のものより多いことが注目される。この漢語系語イを漢字の字数の上からなめる時、二字の漢字で表記されるものが優勢であることが注目される。

(C) 系統の不明なもの

(例) イサッカ・ジンベンナ:

第三節 音節数比較

まず、形容詞と形容動詞との音節数を比較してみると、どちらも共通して、五音節構造の語が最も多くなつてゐる。(形容詞166語・形容動詞49語) いま少し具体的に言えば、熊本市方言の形容語イ中、約33を五音節構造の語イが占めてゐることになる。

ところで、形容詞の中の基本形容詞についてみると、これは、三音節構造の語イが最も多くなつてゐる。(123語) 従つて、形容詞は、三音節構造の語を基本とし、それに接辞がついたり、他と合成したりして、五音節構造の語となり、それが一般(日常)に多く使用されていると言ふことができよう。一方、形容動詞の中の基本形容動詞についてみると、これは、四音節構造の語イが最も多くなつてゐる。(44語) 従つて、形容動詞の基本となる音節数は四音節であり、一般(日常)に広く使われているのは、五音節構造の形容動詞であると言へるのであろう。

つまり、人々の親しみやすい、(口にしやすい)安定感の味わえる語イは、五音節構造の語イであるということになるのであろうか。

以上が、熊本市域方言における形容語イについての研究の要旨である。